

# 自然誌 だぶり 秋

Natural history

三重自然誌の会情報誌 102号

2014年 12月

## 熊野の鳥信－1



1



2



3



4



5



6

①カラムクドリ雌，2014年10月29日～11月8日現在滞在中，御浜町神志山，②カラムクドリ雄，同，③クマタカ1羽，2014年8月3日，熊野市紀和町，④チゴハヤブサ1羽，2014年10月12日御浜町市木，⑤チョウセンチョウゲンボウ（亜種）1羽，2014年10月25日，紀宝町平尾井，真木広造氏・同定，⑥ツメナガセキレイ（亜種）1羽，2014年10月18日，御浜町市木

〈中井節二：熊野市久生屋町1235-4〉

# 伊賀市馬野川におけるヒダサンショウウオの産卵例

清水 善吉・大沼 弘一



写真1 確認地点付近の環境と成体・卵のうの確認地点(矢印)



写真2 成体(矢印)の発見状況



写真3 卵のうの発生状況



写真4 放流した成体

三重県のオオサンショウウオの分布域，すなわち伊賀市，名張市，津市美杉町太郎生での河川工事の際には，オオサンショウウオの保護を目的とした調査を行っている．その調査のなかで，ヒダサンショウウオ *Hinobius kimurae* の生息を確認することができたので報告する．

2013年5月14日，伊賀市奥馬野地内の馬野川において伊賀市により実施された保護調査一川干しをしてオオサンショウウオを捕獲一の際に，ヒダサンショウウオの成体1個体と卵のうを確認した．確認地点は，馬野川の上流で海拔約500m，川幅約2m，水深は深いところでも30cmほどであった．成体が見つかったのは右岸の水辺付近の陸地であり，その左岸側の落ち葉だまりの中で2卵のうを確認した(写真1，2)．

本種は，2～4月に石下や伏流水中に1対の卵のうを産むとされており(松井1979)，重機侵入の影響により付近の石下にあった卵のうが流出した可能性が高い．卵のう内には9および5個の胚が確認され，いずれもエラ形成期の状態であった(写真3)．この発生状況からは10日前後が経過しているとみられるので，産卵は5月初旬にあったと推定される．2卵のうはちぎれた状態で見つかったため，同一メスによるものかは不明である．成体についても，卵のうと近接した地点で確認されていることから，この繁殖に関わった個体である可能性が高い．なお，成体の全長は120mm，体重9.0gであった．保護した成体は工事の影響が及ばない流れの比較的ゆるやかな地点に放流し(写真4)，卵のうは同じ地点の石の下に安置した．

今回の確認地点の環境は，ほとんどがスギ・ヒノキの植林地であるが，広葉樹林がモザイク状に残存し．とくに谷沿いには多くみられる．左岸側に市道がつけられており，護岸がなされているところも多いが，右岸側は自然状態である．アマゴおよびタカハヤの生息を今回の調査時に確認した．

県内においては河川源流域で産卵するイメージの強い本種であるが，比較的水量のある河川でも産卵することが明らかとなった．

文献：松井正文1979. ヒダサンショウウオ. 千石正一編，原色/両生・爬虫類，家の光協会，p.106-107.

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17・おおぬま ひろかず：(一社)兵庫県自然保護協会〉



## 三重県北限のハマボウ

市川正人

ハマボウはアオイ科の落葉低木で、成木では樹高3m程になり、枝を拡げてこんもりとした樹形となる。葉は約3～8cmで基部がくぼんだ円形、花は7cm前後で中心が暗赤色の鮮やかな黄色である。海岸や河口の砂泥地などの沿海地、とくに河口辺りに群落を形成することがあり、国内では本州（神奈川県三浦半島以西）・四国・九州（奄美大島まで）に分布する。県内では津以南で生育が確認され、三重レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

さて、数年前に昆虫専門家の篠木善重氏から「四日市市北五味塚鈴鹿川派川河口部にハマボウが生育している」と教えていただき、2012年1月30日の調査で左岸河川敷（砂泥堆積地）の水際のヨシ原に1個体の生育を確認した。ちなみに、この河口域にはアイアシ（三重県：絶滅危惧Ⅱ類）やフクド（環境省：準絶滅危惧、三重県：絶滅危惧Ⅱ類）が生育し、シナハマグリの輸入稚貝に伴って入った外来系のマツナが見られ（藤井ら2009）、かつてはウラギク（環境省：絶滅危惧Ⅱ類、三重県：絶滅危惧Ⅱ類）の生育も認められた。

また、私個人の植物リスト記録を見ると、2006年9月3日に派川より北に位置する四日市市塩浜町鈴鹿川本川左岸河川敷、河口から約500mの灌木林内にハマボウ発見とあった。この記録を頼りに、三重県北限となるハマボウが今も生育しているか確認すべく、今年の10月19日と25日に踏査を行った。

果たせるかな、ハマボウ1個体（幹径15cm、樹高3m）は水際砂泥地のヨシ原に健在であった（写真1）。しかしながら、この辺りの環境は堤防拡幅・増強工事（進行中）によって一変し、ハマボウの存続が危惧される状況である。以前からある堤防沿いの灌木林は伐採され、工事に支障のないハマボウを含むヨシ原部分だけが取り残された状況にある（写真2）。この地にはフクドやハママツナ（写真3、県：準絶滅危惧）などの絶滅危惧種や、本来は山地谷間に分布のオニグルミ（故・矢頭献一氏は木曾三川から沿岸流で運ばれた種からこの地に定着したと推定）、ツクシイバラ、ホソバハマアカザ、アキノミチヤナギなどが生育し、また干潟にはイソシジミガイ、ソトオリガイ、コメツキガニ、スナガニ、オサガニ、イソガニなどの海浜動物が生息している。

ハマボウの実がどこからか沿岸流にのってこの地に運ばれ、1個体だけが定着したことを想うと大変愛おしい。存続を願いつつも、伐採される可能性も考慮して数本の枝を採取・腊葉標本とした。そして、改変地の事前調査や野生生物への配慮・対策の必要性を改めて感じたのである。

本稿作成にあたり情報提供を頂いた篠木善重氏、工事関係についてご教示頂いた上田利彦氏、鈴木俊介氏、山本和彦氏に感謝する次第です。

文献：藤井伸二・水野知巳2009. 移入と思われる伊勢湾のマツナ（アカザ科）. 植物研究雑誌, 84 (1), 50-54.

（いちかわ まさと：四日市市堀木1-4-5, 606）



写真1 三重県北限のハマボウがつけた季節外れの花（10月25日撮影）



写真2 鈴鹿川本川河口上流域左岸の景観（10月25日撮影）



写真3 ハママツナの紅葉（10月25日撮影）

## おかげ横町で保護されたコシジロウミツバメ

今堀聖史

コシジロウミツバメは、北海道厚岸町大黒島と南千島で繁殖し、冬には少数が太平洋沿岸でも見られますが、青森と岩手以外の本州や離島では迷鳥とされています（鳥類目録第七版、日本の野鳥650平凡社）。ウミツバメ科の7種は「ツバメ」の語感に惑わされますが、ミズナギドリ目に属する海洋性の鳥で、繁殖地以外では幸運な発見がない限り観察できません。今回、その幸運に巡り会う機会がありましたので報告します。

今年の10月6日、伊勢市おはらい町おかげ横町の路上にうずくまった状態のコシジロウミツバメが通行人に保護され、伊勢市役所、県伊勢農林水産事務所を經由してフジサト動物病院に届けられました。触診と給餌、経過観察ののち10月7日の夕方に東大淀町の北浜海岸でリリースされました。この個体は、10月6日未明に紀伊半島沖を東進した台風18号の暴風に流され、伊勢市内に漂着したと思われる。イタチなどに襲われたり車に轢かれたりすることなく、優しい人たちに会って命拾いし、本誌に登場したわけです。

20年に一回あるかないかの大変貴重な記録ですので、私は送られてきた写真を何度も手に取り、実物が見たくなって佐野明さんに紹介していただき、7日にフジサト動物病院を訪問しました。院長の春日先生は鳥をケージから出して写真を撮らせてくださったので、長い翼や白い腰、上嘴のつけ根にある器官、体色などを実感することができました(写真1, 2)。幸運な出会いの背後に傷病鳥獣を保護するシステムがあり、県民に浸透して機能していることを改めて感じました。

また、高橋松人さんに写真を届けて種名の確認をお願いした際にも、コシジロウミツバメを預かって香良洲でリリースした経緯をお聞きしました。今回と同様、台風の翌朝に雲出小学校6年生の女兒



写真1 腰の部分に白帯がある



写真2 元気になったようす(矢印は管鼻)

が国道の陸橋にうずくまっていた鳥を見つけ、担任の先生と一緒に届けてくれたそうです(1982年)。

三重県での初記録として、1979年10月19日と20日に伊勢地方で4羽のコシジロウミツバメが拾得されたと記録されています(橋本太郎1983三重県鳥類の分布と生態—記録・生態写真集—)初記録がこんなにも新しいことに驚き、遠い昔から伊勢志摩の海辺では嵐に弱った鳥たちを目にしていたに違いないのに何故だろうと今も疑問が残っています。

なお、ミズナギドリ目の鳥は上嘴のつけ根に左右の外鼻孔が一体化した管(管鼻)があり、塩分を排出するとともに鋭敏な嗅覚によって動物プランクトンを見つけているそうです。コシジロウミツバメは帰巢や巣穴の定位を鋭敏な嗅覚能で行っており、嗅覚神経を除去すると帰巢率が25%に低下するという報告があります。

〈いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30〉



# 帰ってきたムラサキガイ

中 野 環

ムラサキガイ *Soletellina adamsii* は、房総半島から台湾にかけて分布する殻長120mmほどの二枚貝です。和名のとおり、殻の表面や内面が紫色になる特徴がありますが、生きた個体では褐色の薄い殻皮で覆われているため、落ち葉のように見えます。三重県では白塚、大淀、二見、槌柄浦から記録があり（松本1979）、伊勢湾沿岸が主な生息地です。わずかですが、志摩市浜島町や熊野市新鹿町など、熊野灘に面した地域でも死殻を確認しています。

槌柄浦は私の故郷ですが、ムラサキガイが生息するような内湾干潟が広がる環境ではありません。かつてはどのような環境であったのか、亡父に聞いておけばよかったと思います。

ムラサキガイは比較的大きい貝なので死んで海岸に打ち上げられると目立つのですが、潮間帯から潮下帯にかけて生息しており、潮干狩りをしても生きた個体をみる機会は多くありません。私が小学生の頃には、二見浦で打ち上げられた死殻をたくさん見ましたが、1990年代になるとその数はめっきり減りました。

最近になってムラサキガイが帰ってきたようで、2012年12月頃からは津市から伊勢市にかけての海岸で多くの死殻を確認することができるようになりました。死殻の数に比べるとわずかな数ですが、生貝も確認することができます(写真1, 2)。1980年代でも得られにくかった幼貝も多く、伊勢湾沿岸で世代交代を繰り返しているようで、殻長15mmから140mmまでのさまざまなサイズの殻が打ち上げられます。

同じシオサザナミガイ科に属するオチバガイ *Gari (Psammotaena) virescens* も、かつては伊勢湾を中心に多数生息していましたが、1990年代になると死殻さえほとんど確認できなくなりました（松本1994）。1999年頃から幼貝が確認されるようになり（中野2000）、その後は、津市から松阪市にかけて爆発的に増加しましたが、現在は、また少し数を減らしています。

三重県でムラサキガイが増加していることを嬉しく思うと共に、今後、どのような周期で消長をするのか気になります。



写真1 干潟で見つけたムラサキガイ

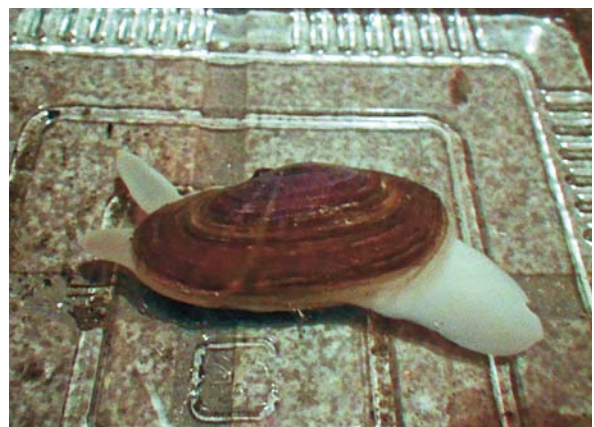


写真2 軟体部をのばすムラサキガイ

## 文献

松本幸雄1979. 三重の貝類（三重県産貝類目録）. 鳥羽水族館, 179p.

松本幸雄1994. 三重県の実産貝類. 三重生物教育会編, 三重の生物, 三重生物教育会, p306-311.

中野 環2000. 津市の干潟におけるオチバガイ *Psammotaena virescens* の生息記録. 三重自然誌, (6), 73-82.

〈なかの たまき：度会町大野木1711-1〉

# 和具大島の植物

山本和彦

和具大島（以下大島と記）は和具港より南に約2.5kmの海上にある周囲約1.2kmの小さな島です。本島は1936年に三重県の天然記念物に指定されており、その植物相については、伊勢志摩国立公園自然科学調査志摩の自然（矢頭 1965）、伊勢志摩国立公園計画再検討並学術調査報告（矢頭 1968）、平成13年度地域で守りたい自然「広の浜・黒の浜・和具大島」動植物調査（半田 2001）等に詳しく報告されています。10月18日に大島に渡る機会があり（写真1）、精度の粗い調査ですが、島内を歩いて確認した植物を2014年秋の記録として書き留めてみました。なお、調査にあたっては天然記念物の現状変更許可（第12-362号）を取得しています。

今回確認した植物は品種も含めて67種で、一覧は下段に示しています。前述の半田（2001）では季節を変えて5回の調査を実施し、94種の植物を報告しています。また半田（2001）にはオッタチカタバミ、サネカズラは記載されていませんが、これらは2001年以降に大島に入り込んだのかもしれませんが、ちなみにオッタチカタバミは帰化種、サネカズラは在来種です。

国のレッドデータブックで絶滅危惧 I A類に指定されているハギクソウは確認できませんでした。前述の矢頭（1965,1968）では、ハギクソウの生育が報告されていますが、その後生育不明となり、絶滅したといわれています。今のところ三重県での自生は大島の記録しかありません。

ヒゲスゲを確認することができました。本種は矢頭（1965,1968）には記載されていませんが、半田（2001）では報告されています。今回も東と西側の岩場等で群生地を見ることができました。ヒゲスゲは海岸性の植物で、本州（石川県、千葉県以西）、四国、九州、沖縄に分布しますが、どこにでもあるといったものでなく、分布が限られています。近畿、東海地方でも兵庫県と愛知県の自生地はそれぞれ一ヶ所、静岡県は伊豆半島の一部にのみ見られ、和歌山県では記録がありません。三重県でも局



写真1 海上からみた和具大島

限されていて、今のところ鳥羽、先志摩半島周辺と南張（南伊勢町）に限られています。

矢頭（1965,1968）にはヒゲスゲとよく似ているキノクニスゲが報告されていますが、今回確認することができませんでした。ヒゲスゲの誤認であった可能性もありますが、探しやすい果実を付ける時期に一度渡島したいと思っています。

## ■和具大島の植物一覧（2014年10月18日）

オニヤブソテツ、クロマツ、イヌビワ、ギシギシ、ツルナ、ハマナデシコ、ホソバアカザ、オカヒジキ、ヒナタイノコズチ、サネカズラ、ヤブニッケイ、タブノキ、シロダモ、センニンソウ、ハスノハカズラ、フウトウカズラ、ヤブツバキ、ハマヒサカキ、キケマン、ハマダイコン、トベラ、シャリンバイ、テリハノイバラ、ハマナタマメ、ハマエンドウ、オッタチカタバミ、ヤマアイ、モチノキ、マサキ、ノブドウ、マルバグミ、タチツボスミレ、コマツヨイグサ、キツタ、ハマウド、ハマボウフウ、ハマボッス、イヨカズラ、ヘクソカズラ、ハマサオトメカズラ、ハマヒルガオ、アメリカネナシカズラ、ハマゴウ、ヒヨドリジョウゴ、スイカズラ、ヨモギ、ハマアザミ、シロバナハマアザミ、アゼトウナ、キノクニシオギク、ツワブキ、ニガナ？、ハマニガナ、セイタカアワダチソウ、ネコノシタ、オニタビラコ、ヤブラン、アツバキミガヨラン、アロエ類、ハマオモト、ケカモノハシ、ススキ、ハマエノコロ、ウラシマソウ、コウボウムギ、ヒゲスゲ、コウボウシバ。

〈やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40〉



## 松阪市伊勢寺町の民家庭へのカモシカ侵入事例とその関連情報

富田 靖 男

2014年6月5日、松阪市伊勢寺町の民家の庭にカモシカがブロック塀を飛び越え侵入しました。場所は、伊勢自動車道松阪ICから一つ目の信号を右折して約200m地点(環境省メッシュ5136-6388)、県道59号線沿い東側の民家です。動物進入防止フェンスのある伊勢自動車道の東側であり、県道45号線(合ヶ野松阪線)か568号線(瑞巖寺庭園線)を移動してきたものと推察されます。

侵入したのは早朝5時半頃のように、家主がカモシカと闘争している飼犬(柴犬)の鳴き声で気づき、通報しています。松阪市教育委員会文化課の木野本和之氏より私も昼ごろ連絡を受け、駆けつけましたが、カモシカは庭の一角で立ったままほぼ動かず、道路側の私たちを注視していました(写真1)。健全と思われる個体であり、捕獲保護放獣の必要性のあることから、文化課では麻醉銃を取り扱える亀山市の猟友会の方に依頼し、15時33分に無事捕獲されました。計測値は頭胴長105cm、尾長9cm、肩高65cmで、角のエッジより7歳と推定される雄でした。

放獣場所には過去にカモシカを目撃記録のある伊勢寺町の県道45号線沿いの山林を選定し、文化課の木野本氏と新田和弘氏および猟友会の方とともに堀坂峠に近い“おとめの滝”付近(5136-6365)で分岐する林道に、小雨のなか16時15分に放しました。その後、しばらく様子を見守りましたが、カモシカは林道の奥の方へ移動し、クズなどの植物を盛んに食べ始めたので安全と判断し(写真2)、17時45分に帰りました。また、翌朝、木野本氏が確認に行ったところ、カモシカはいなかったとのことなので、麻醉銃捕獲の影響も少なく無事、放獣されたものと思われます。ちなみに、カモシカと闘争した柴犬は角で数か所突かれ、獣医師の手当の甲斐もなく、当夜死亡したとのことです。

ところで、紀伊半島、四国、九州など、カモシカの生息密度の低い地域では、近年、ニホンジカの食害による下層植生の荒廃などにより、元来山岳の動物である本種が高地から低地へ移行している傾向にあり、このことは本年度のカモシカ全国会議でも話題になりました。三重県には鈴鹿山地個体群と紀伊山地個体群の二つの個体群がありますが、両個体群の交流は現在のところみられません。ちなみに、鈴鹿山地のカモシカ生息密度の動向をみると、環境庁、文化庁および林野庁の三庁(当時)合意による保護地域を始めとする山岳地帯では、保護区指定後第1回特別調査(1981年)以降、第4回(2007年)まで回を追うごとに密度が著しく減少しており、逆にニホンジカの生息密度は大幅に増加しております(三重県教育委員会ほか2008)。特に近年の情報では、かつてのカモシカ生息域がニホンジカに変わりつつあり、危機的な状況です。

紀伊山地個体群については2008～2009年に第4回特別調査が実施されましたが、区画法による生息密度は、三庁合意による保護地域を中心とした山岳地帯では、前3回の特別調査の0.6頭/km<sup>2</sup>と比べて0.4頭/km<sup>2</sup>と減少しており、全国の保護区で最も低い密度でした。一方、ニホンジカは鈴鹿山地同様、回を追って増加しており、4.1頭/km<sup>2</sup>で、カモシカの約10倍でした(三重県教育委員会ほか2010)。

カモシカはニホンジカの増加とそれに伴う下層植生の荒廃等により、鈴鹿山地や紀伊山地の個体群



写真1 民家の庭の片隅でこちらを窺うカモシカ



写真2 放獣後餌を食べ始めるなど安定した状態のカモシカ

も山岳地で減少している反面、三重県側では東部の低地へ分布を広げている傾向にあります(富田2010)。たとえば、今回伊勢寺町の民家に侵入した松阪市では昨年来、これまで分布域に入っていなかった旧松阪地区において、本件以外に下記の記録がみられます。

- ① 松阪市伊勢寺町県道45号線(合ヶ野松阪線)沿いのニジマス養殖場より約100m西側地点(5136-6365～6366), 2013年11月6日, 幼獣1頭, 佐波征機氏確認。
- ② 松阪市辻原町阪内川支流ツヅラ又川のコンクリート堰堤護岸(5136-6315), 2014年4月3日, 地元住民および松阪市教育委員会文化課等確認。口の周辺にパラボクス感染症と思われる炎症あり。夕刊三重新聞にも写真掲載。
- ③ 松阪市後山町の路上(5136-6352), 2014年8月1日, 交通事故と推定される死体が確認され, 角を松阪市教育委員会文化課で収得。角のエッジより7歳と推定される雄。

これらの記録のうち、後山町の交通事故と思われる滅失個体は、今回の保護放獣個体と同年齢と推定される雄です。また、後山町と伊勢寺町の放獣場所とは堀坂連峰の稜線をへだてて3km余りの距離があるものの、2カ月弱の間に移動していることも考えられ、同一個体の可能性もあるので、いささか気がかりです。先の保護個体についてもDNA鑑定用サンプルとして体毛が採集されているので、いずれ明らかにされるものと思われそうですが、別個体であることを願いたいところです。

カモシカの低地移行が進行すると、ヒトとの接触機会も多くなり、農作物食害や輪禍等、今後いろいろな問題の生ずる可能性が示唆されます。

#### 文献

三重県教育委員会ほか2008. 平成18・19年度鈴鹿山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書, 107p.  
三重県教育委員会ほか2010. 平成20・21年度紀伊山地カモシカ保護地域第4回特別調査報告書, 219pp.  
富田靖男2010. 紀伊半島カモシカ個体群の分布の動向. 自然誌だより, (86), 7-8.

〈とみだ やすお：松阪市川井町822〉

## 事務局から

### ○自然誌だより合冊本完成

本誌99号で案内しました合冊(1～50号と51～100号の2分冊)ができました。注文をしていただいた方には既にお届けしましたが、若干の残部がありますので購入希望の方はお知らせください。先着順で、セット5千円+郵送料です。

### ○鈴鹿青少年の森湿地保全活動を1月14日(水)に実施しますので、参加希望は事務局までご連絡ください。

### ○会報の原稿募集

会報「自然誌だより冬号」は3月発行予定です。観察記録や会への意見・要望、自然保護活動などについて、ふるってご投稿ください。



### 編集後記

富田さんのカモシカ記事の捕獲場所は自宅の近くですし、11月18日に津市戸木町でツキノワグマの目撃情報もあります。どちらも山の動物ですが、今、なにかが変わりつつあるように感じます(善)。

## 自然誌だより102号

発行日 2014年12月5日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp